opusdei.org

聖ホセマリアの生涯 - 46

聖ホセマリアの母親ドローレス夫人の一生は、晩年に息子が激しい中傷を受けることを目にしなければなりませんでした。

2024/05/08

過去の記事はこちらから

聖ホセマリアの母親ドローレス夫人 の一生は、晩年に息子が激しい中傷 を受けることを目にしなければなり ませんでした。ある日、「あなたに は、一日たりとも心安まる日はない のね」と言って嘆いたそうです。

この迫害は主にある修道会の会員か ら出ていました。修道会に入ること なしに世間で生活しながらキリスト 教的な完徳を目指すという考えは危 険な教えで、修道会から志願者を奪 うと危惧したようです。中傷は説教 台から生まれ、事実をよく知らない 他の聖職者たちにも広げられまし た。そのうち、オプス・デイのメン バーやセンターに通っていた青年た ちの両親を訪ね、子どもが異端に陥 ろうとしているので気をつけるよう にと警告し、家族を悲嘆に陥れるよ うなこともありました。教会の中で 始まった中傷はすぐに世俗世界にも 広がり、創立者は裁判所に訴えられ る危険さえ生じました。

このような中でオプス・デイと創立 者を断固として弁護したのがマド リード大司教、そして創立者を知る 各地の司教や司祭でした。聖ホセマリアと同様、これらの人々はこの常軌を逸した迫害は神がオプス・デイを成長させるために許された試練とみていました。事実、カトリック教会の歴史を見ると、何か新しい知知を受けるということは珍しくありませんでした。

このような考えと神への強い信頼のために、聖ホセマリアは落ち着した。とはありませんでした。引きが教会の内外に引きでいたの。この追害が教会が神の御はいる責任を考えるとがではないる中傷が表れているがになります。

尾崎明夫

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/ Hijiri-hosemaria-no-Shougai-46/ (2025/12/12)